

## 海水試料の毒量分析による麻痺性貝毒モニタリング 手法の開発と検証

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-08-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 及川, 寛, 山本, 圭吾, 長井, 敏 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010534">https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010534</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



## 海水試料の毒量分析による麻痺性貝毒モニタリング手法の開発と検証

及川 寛・山本圭吾・長井 敏

海水中の麻痺性貝毒量をモニタリング指標として利用することを目指し、モニタリングで必要とされる感度で毒量を高速液体クロマトグラフィー (HPLC) により測定する方法を検討するとともに、大阪湾の現場海水試料で指標としての可能性を検証した。大阪湾の *Alexandrium tamarense* は複数含まれる毒成分のうち C2 (N21-sulfocarbamoyl gonyautoxin-3) の組成比が最も高く、培養細胞を添加した海水の検討では、行政が注意喚起する細胞密度 (5 cells/mL) において、C2 分析ピークの S/N 比 (signal to noise ratio) が定量下限の 10 を超えるには、目合い 15  $\mu\text{m}$  のネットで 20 倍以上に濃縮することが必要と考えられた。2012 年 2～5 月に大阪湾で採取した海水は *A. tamarense* が最大で 1.0 cells/mL と低かったため 100 倍以上の濃縮を行い分析したところ、C2 の測定値と細胞密度は良い相関を示し、本手法による毒量値はモニタリング指標として利用できる可能性があると考えられた。

水産技術, 6 (2), 161-167, 2014